松本城三の丸跡

～土居尻武家屋敷跡の発掘調査概報～

松本市教育委員会

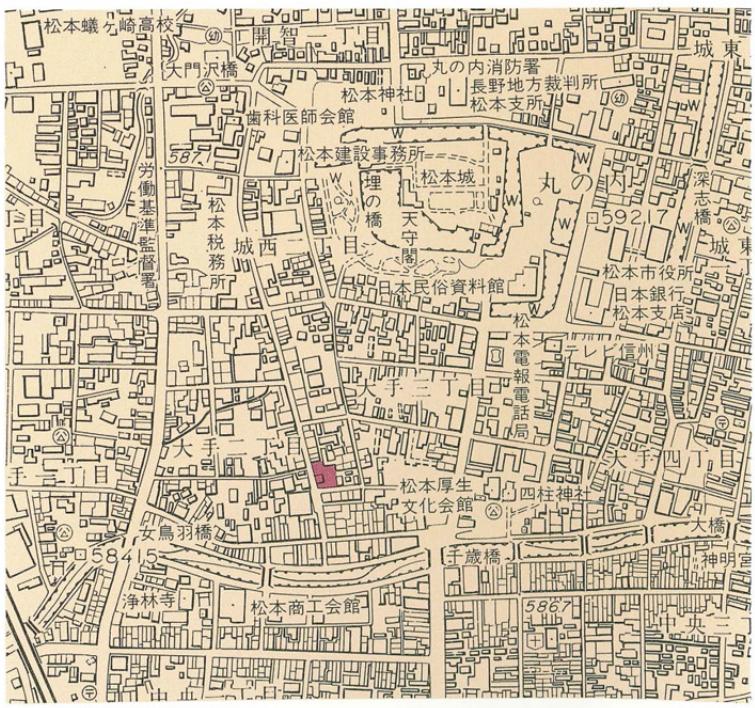
はじめに

国宝松本城は近世初頭に天守閣が造営され、松本の歴史的発展の象徴として今日にその雄姿を残しています。現在の松本市街地は、松本城の城下町を基礎として発展してきました。市街地の地下には“松本のルーツ”が今も埋もれており、当地方の近世史解明の鍵を握る重要な遺跡と言えるでしょう。今回の発掘調査は松本市による市営大手駐車場建設に先立つもので、松本市教育委員会が実施しました。調査は、平成３年４月９日から７月19日にかけて行われ多くの成果をあげることができました。本書は今回の調査について概要を報告するものです。

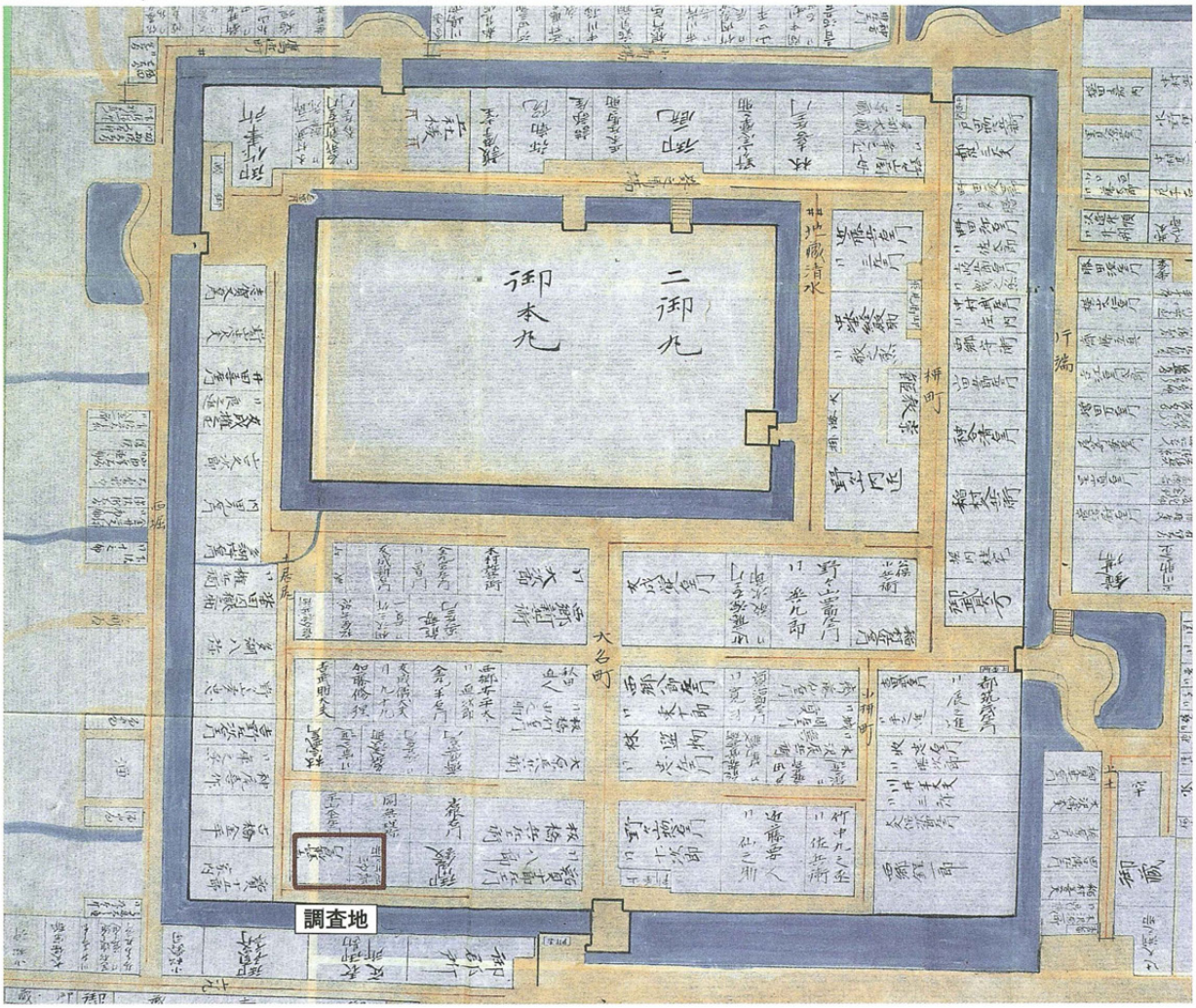
調査地の立地・環境

調査地は、松本市のほぼ中央、松本城の南約500mに位置しています。標高は約587m前後で、西へ緩く傾斜する市街地です。地質的には、女鳥羽川や薄川の扇状地の扇端にのっています。各扇状地の末端は集水地域となり、地下水（伏流水）や湧水に富み、滞水によってデルタ性の低湿地が出現しました。これらの豊富な地下水や湧水は、城内外の水源として利用されました。

中世以来、信濃国は守護の小笠原氏が勢力を拡大しました。天文19（1550）年、小笠原氏は長時の代に甲斐の武田晴信（信玄）に追われるが、再びこの地方の支配権を回復します。天正10（1580）年小笠原貞慶は武田氏の信濃国の拠点であった深志城を松本城と改め、その基礎のうえに立った城下町づくりを開始したのです。貞慶は、武家屋敷と町屋を明確に区別した近世的な城郭プランの形成に力を注ぎました。天正18（1600）年、豊臣秀吉により石川数正が松本にはいり貞慶の事業を発展させ、数正没後はその子康長により天守閣の完成を頂点とする町づくりが推進されました。

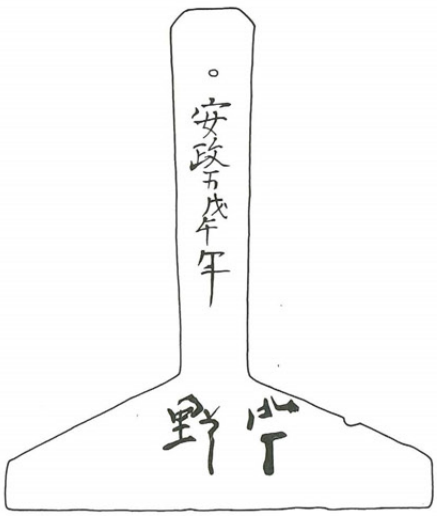


調査地



▲嘉永七年三月に作られた城下の図

石川氏が慶長18（1618）年に、改易になったのち、小笠原氏２代（1613～17年）、戸田氏２代（1617～33年）、松平氏１代（1633～38年）、堀田氏１代（1638～42年）、水野氏６代（1642～1725年）、戸田氏９代（1726～1871年）とめまぐるしい藩主の交替を経て明治維新を迎えています。これらの大名は徳川家と縁が深く、松本の地が幕府にとって要衝の地であったことがうかがえます。



▲「安政五戊午年 宇野」という墨書のある刷毛（はけ）

嘉永七年（1854年）の絵図をみると、調査地には宇野伝衛門（うのでんえもん）という人物が住んでいたことがわかります。

土層が語る城下町の歴史

西暦	年号	主なできごと
1991年	平成 3年	三の丸土居尻町の発掘調査行われる
1867年	慶応 3年	大政奉還。
1727年	享保12年	松本城本丸焼失する。
1726年	享保11年	戸田光慈、鳥羽（三重県）から入封
1725年	享保10年	水野忠恒、江戸城において刃傷、改易となる。
1642年	寛永19年	水野忠清、三河吉田（愛知県）から入封。
1638年	寛永15年	堀田正盛、川越（埼玉県）から入封
1633年	寛永10年	松平直政、越前（福井県）大野から入封。
1617年	元和 3年	戸田康長、上野（群馬県）高崎から入封。
1613年	慶長18年	小笠原秀政、飯田から再入封し松本の町並みを整備する。
1603年	慶長 8年	江戸幕府開く。
1590年	天正18年	石川数正、和泉（大阪府）から入封石川氏２代で、松本城を築く。
1584年	天正12年	このころから小笠原貞慶、城下町の経営にかかる。
1582年	天正10年	小笠原貞慶、父祖の旧領を回復し深志城を松本城と改める。
1550年	天文19年	武田晴信、小笠原長時を林城に破り松本地方を支配する。武田晴信、深志城を惣普請する。

遺跡の発掘調査は、常に土層の観察をしながら進めていきます。土層の堆積は、自然堆積であれ人為堆積であれ基本的には下の方が古いのです。

調査地点の土層は、大きく４層に分けられます。これらの層は、城下町時代からの人為的な整地層と考えられ、現地表下約170cmも堆積しています。つまり、火災・災害・屋敷替えなどによって町が一掃されてしまうと、その残骸が整理・整地され、次第にかさ上げされたものと考えられます。各土層の時期は遺物・土層などから、第１層：明治時代以降（２０世紀以降）、第２層：江戸時代後期（１８世紀後半～１９世紀代）、第３層：江戸時代中期（１７世紀後半～１８世紀前半）、第４層：戦国時代末～江戸時代前半（１６世紀末～１７世紀前半）と推定されます。

各層から見つかった遺構には様々な種類がありました。調査により、屋敷の基礎・井戸・竹や木で作られた上水道・下水用の溝・ゴミ溜・池（？）など、絵図や古文書からはうかがえない光景が現われました。

第１検出面（明治時代以降）

第２検出面（江戸時代後期）

第３検出面（江戸時代中期）

第４検出面（戦国～江戸時代初期）

〈各検出面の遺構・遺物〉

第１検出面

遺構：建物跡６、土坑16、石組水路１、埋設甕（便所甕など）14

遺物：陶磁器、銭貨など

第２検出面

遺構：建物跡２、土坑45、井戸13、木桶２、竹管10

遺物：陶磁器、土器（灯明皿・内耳（ないじ）鍋など）、木製品（漆椀・曲物（まげもの）など）、金属製品（キセル・かんざし・火箸など）

第３検出面

遺構：建物跡３、土坑260（ゴミ溜など）、井戸10、溝４

遺物：陶磁器、土器（灯明皿・内耳鍋）
木製品（漆椀・曲物など）
金属製品（キセル・かんざしなど）、その他（砥石（といし）・碁石（ごいし）など）

第４検出面

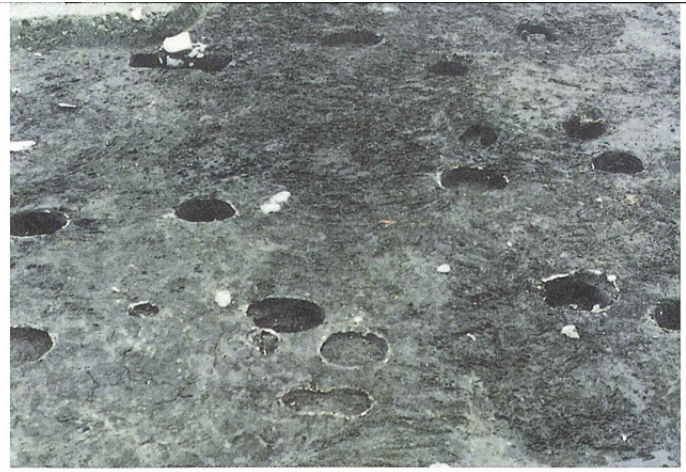
遺構：建物跡５～６、土坑101、井戸１、溝５

遺物：陶磁器、土器（灯明皿・内耳鍋）
木製品（漆椀・曲物・下駄など）
金属製品（キセルなど）、その他（印鑑）

▲礎石が並ぶ建物址

武士のすまい

調査区の中央には、南北方向に溝が通っています。これは、東西２軒の武家屋敷地を区画する溝と考えられます。調査区西側は、屋敷地のほぼ全域を確認することができました。江戸時代後期に、ここに住んでいたと考えられる宇野伝衛門さんのすまいを想定してみましょう。道との境界は塀が築かれています。玄関は西側で、建物は２～３棟みられます。建物の基礎は礎石を使用しており、礎石の下には栗石（拳大の根固めの石）を多くいれて強固にしています。北側には井戸があり、竹製の水道管を埋設して屋敷地内に配水しています。屋敷地の南北の隅には、ゴミを埋める穴が掘られています。屋敷の東側中央部には池と考えられる大きな掘り込みがあります。池のある庭があったのでしょうか。



▲建物址の柱穴

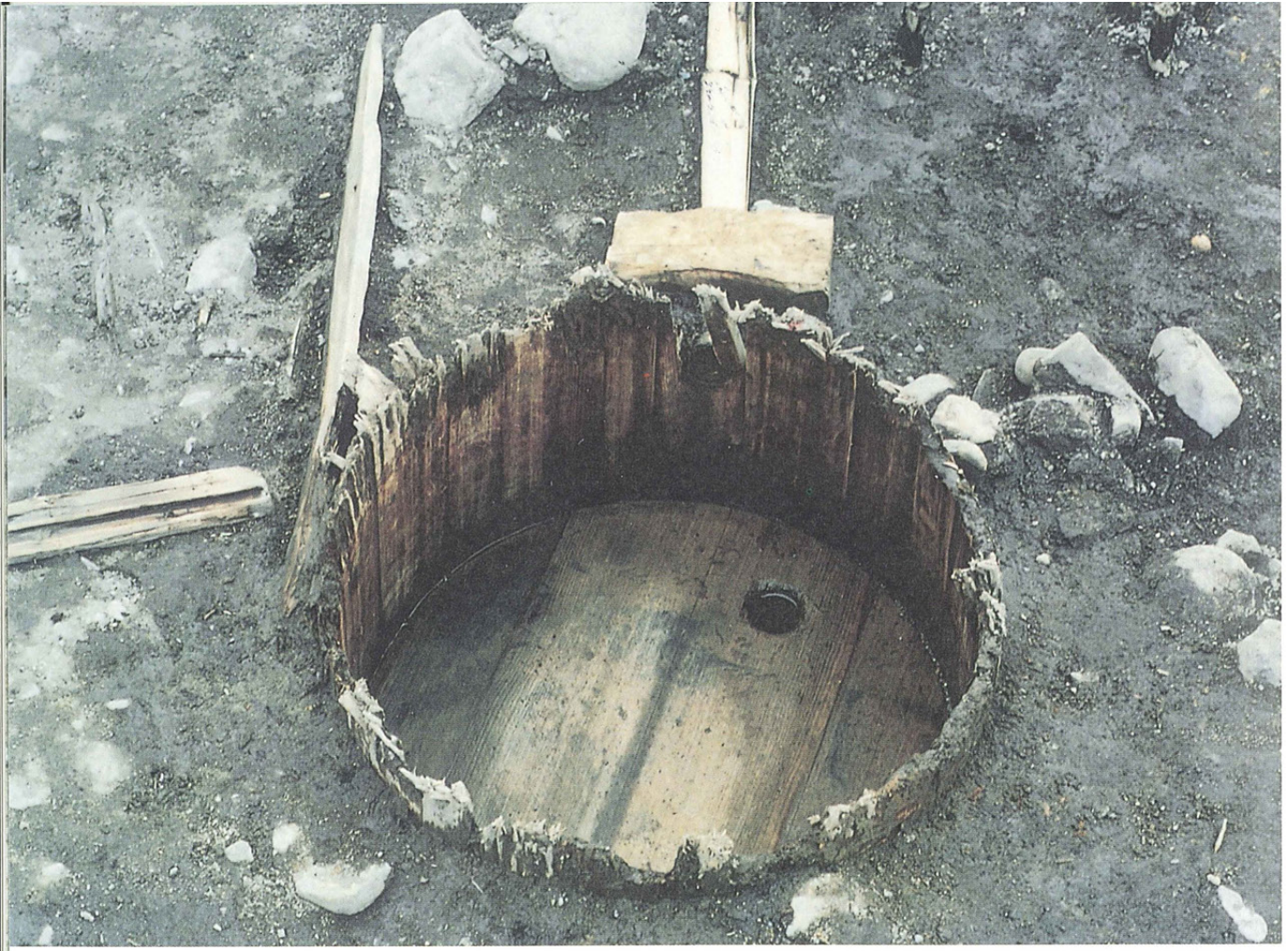
▲礎石に残る柱跡

◀ゴミ穴

ゴミ穴から出土する遺物は、当時の生活を最も生々しく伝えてくれます。左のゴミ穴では、陶磁器・漆器の食器類、膨大な量の箸、食べかす、壊れた下駄などがみられます。江戸時代は、現代のように収集車がゴミを集めることはありません。このため各屋敷でゴミを処理しており、発掘調査では無数のゴミ穴がみつかりました。

屋敷境の溝 ▶

溝の内側には、土止め用の無数の杭が打たれています。杭の間には、板や丸材を渡して耐久性の高いものにしています。



▲竹の水道管で配水する井戸（19世紀代）

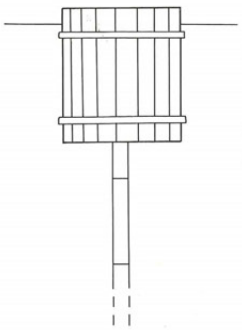
井戸と水道

水は、人間が生活するには必要不可欠なものです。三の丸に住んでいた武士たちは、水を得るために様々な工夫を凝らして井戸・上水道施設を整備していきました。

調査地一帯は湧水に恵まれており、総計24基の井戸が発見されています。井戸の構造は、右図のC類→B類→A類のようにだんだん改良されていきました。A類・B類の井戸には、竹の節を抜いて作った水道管が付属するものもみられます。時期は、A類が19世紀代、B類が17世紀前半～18世紀代、C類は17世紀前半以前と考えられます。竹管による上水道は、17世紀後半～18世紀前半にかけて整備されたと考えられます。16～17世紀にかけては、水をいちいち汲みに行かなくてはならなかったのです。18世紀以降は、水道管により配水されてずいぶん便利になったことでしょう。

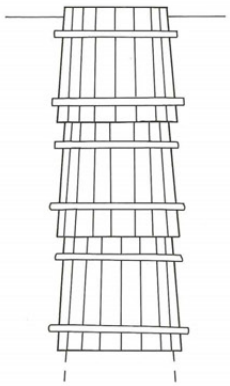
▲集水桝（ます）

A類の井戸



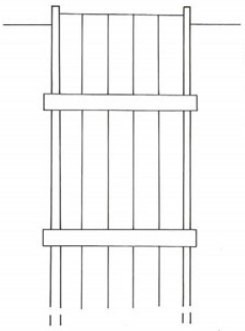
桶の底に穴をあけ、竹管を設置した井戸。水圧により竹管から噴水させて、桶の側面から竹管により配水するもの。

B類の井戸



桶状のものを数段重ねている井戸。地下水脈まで掘り抜いている。

C類の井戸



方形に木枠を組んでいる井戸。四隅に角材を立てて、その間を縦方向に板を巡らすもの。

やきものの美

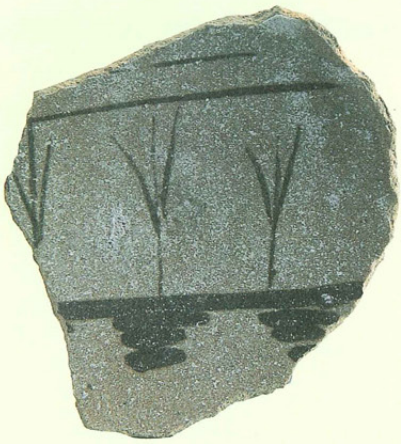
瀬戸（愛知県）・美濃（岐阜県）▶
地方で焼かれた皿

▼志野　小碗

近世の松本は、信濃国の政治・経済の中心地でありました。このことは、出土品からもうかがうことができます。出土したやきものは、国内各地だけでなく中国産のものも見られ、当時の商人たちの活発な交易活動の様子がわかります。

▲黒織部　茶碗

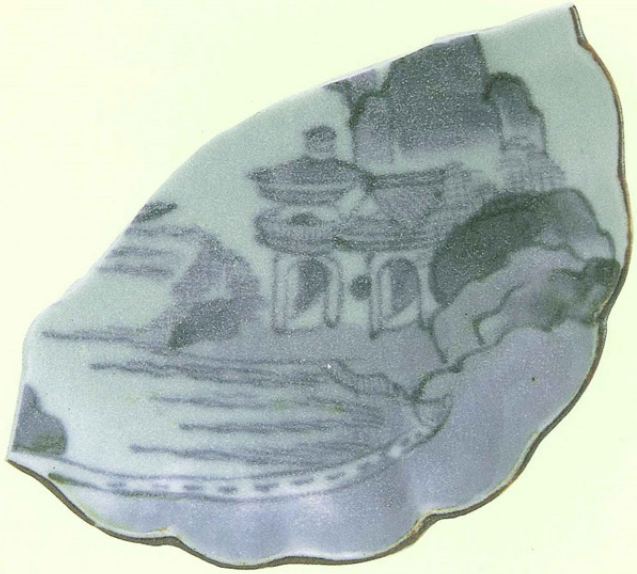
▲呼び継ぎ痕のある皿
（割れた部分を漆で接合している）



▲唐津　向付

▲中国製の青磁
（呼び継ぎ痕のある皿）

出土品のほとんどは日常生活に使う食器ですが、なかには茶道で使う茶碗、茶入れなどの美術品もみられます。日用品の碗・皿・徳利などは主に国内産で、瀬戸（愛知県）・美濃（岐阜県）地方で焼かれた陶器や肥前（佐賀県）地方で焼かれた磁器などが多量にみられます。輸入品では、中国景徳鎮で焼かれた染付碗や皿などがみられます。



肥前（佐賀県）地方で焼かれた
染付皿（左）と蓋（上）

漆器の美

▲漆椀

▲漆椀

▲木目が美しい皿

各検出面からは、様々な漆器が出土しています。武士が使う食器では、やきものの他に漆塗りの椀・皿・蓋が広く使われていたようです。地色には、黒色・朱色、および「うるみ」とよばれる栗色があります。いずれも様々な文様をもっています。家紋や模様が描かれていたり、金箔を貼った豪華な模様のあるものもみられます。

漆を塗る職人

金箔を貼った蓋（会津塗か）

漆器職人の技

分銅（おもり）の模様のあるもの

▲墨書のある灯明皿

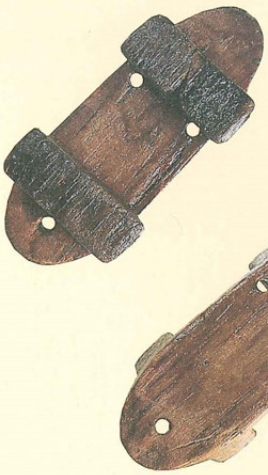
▲灯明台と灯明皿

◀灯明皿と油壺

灯　す

まだ電灯もない江戸時代では、どのようにあかりを灯していたのでしょうか。電気以前の照明は、火がその光源の役割を果たしていました。あかりを灯す道具は、素焼きの土器や陶磁器の灯明皿（とうみょうざら）がみられます。これらの灯明皿に、荏胡麻（えごま）などをしぼった油を入れ、芯（しん）をおいて火をつけます。このため、ほとんどの灯明皿の縁には、黒くこげた煤（すす）がついています。このような灯明皿のわずかなあかりは、今日からすれば非常に暗かったことでしょう。

◀ 紋様のある下駄



▲補修痕のある下駄

履　く

履物（はきもの）としては、100点をこえる多量の下駄が出土しており、当時の日常の履物として一般的に普及していたことが窺えます。下駄には、形状や歯のつけかたにより様々な種類のものがみられます。大きく分類すると、一本の木から台と歯をつくる連歯（れんし）下駄と、歯と台を別の木でつくってはめ込んだ差歯（さしば）下駄にわかれます。連歯下駄には、台裏を円形に抉（えぐ）ったポックリ下駄や雪下駄などもみられます。これらの中には、歯がほとんどすり減ってしまったものや、修理をしたものもみられるため非常に大事に履かれていたことが窺えます。

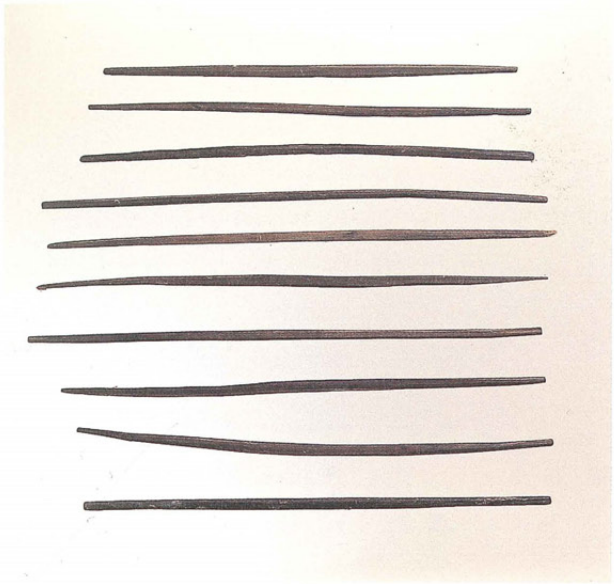
下駄を作る職人

調 理 具

◀内耳鍋（ないじなべ）
吊り下げられるように、内側に耳がつく素焼の鍋

▲杓子（しゃくし）

▲曲物（まげもの）



◀ 箸

調査地からは、400本を越える多量の箸が出土しています。これらのうち、漆塗の箸は1膳のみで、ほとんどが白木で両端を細く削っています。これらの箸が多量に廃棄されていたゴミ穴がみつかっており、使い捨てにされていた可能性があります。

▶ 庖丁（柄の部分のみ出土）

▶ **木製台付の砥石**

6～7cm大の小形の砥石が、木製の台に設置されているもの。庖丁などの小形品を研いだものでしょう。

武家屋敷の台所で使われた器具にはどのようなものがあったのでしょうか。水や食糧を貯蔵しておく容器は、桶・曲物・樽・甕・壷などがあげられます。調理具は、内耳鍋・ほうろく鍋・杓子・庖丁・すり鉢・石臼・箸などが出土しています。材質では、木製品と陶磁器が大部分を占めます。このように、陶磁器や漆塗製品が広く普及するようになったことは、江戸時代の文化の特色にあげることができます。

◀人名の書かれた木札（きふだ）　三浦　喜左衛門

▲墨書のある灯明皿

▲「人足壱人」と書かれた札

▲刻書（こくしょ）のある漆椀

▲硯（左）と水滴（右）

書く

江戸時代の文房具で出土数が多いのは、硯（すずり）と水滴（すいてき）です。硯は石で作られており、古代にみられるやきものの硯は全く見られません。水滴は、銅製と陶製があります。やきものでは、瀬戸・美濃産の鉄釉（てつゆう）や灰釉（かいゆう）がかけられたものが多く見られます。なお、本遺跡からは筆・墨は出土していません。

これらの文房具を使って書かれた文字は、木製品、陶磁器・灯明皿などにみられます。木製品では荷札や建築部材に文字がみられ、陶磁器や灯明皿は底や内面に書かれています。内容は、人名・地名・施設・数字・年号など様々なものがみられます。

◀漆塗りのびんだらい

◀金箔を貼ったキセル

櫛挽『七十一番職人歌合』より

▲櫛

装　う

化粧道具は、櫛・毛抜・髭だらい・お歯黒皿・紅皿・笄が出土しています。櫛には、目の細かいものと粗いものがみられます。笄は髪を整えたり装飾するために用いられていましたが、先端に耳掻きが付いているものもあります。喫煙具では、キセルが多量に出土している。まれに金箔を貼っている豪華なものもみられます。

▲立沢瀉紋（水野家）

▲軒平瓦

▲五三桐紋（松平家）

▲桟瓦

▲巴紋

江戸時代の瓦

武家屋敷跡からも瓦が出土しています。軒先を飾った瓦には、家紋のついた瓦も見られますが、ほとんどが巴紋です。江戸時代中期までは、丸瓦と平瓦を組み合わせた本瓦葺が主流ですが、江戸時代後期以降になると、現代と同様な丸瓦と平瓦のつながった桟瓦葺になります。しかし全体的に出土量は多くないため、建物の屋根すべてに瓦があったかどうかは不明です。

調査の成果

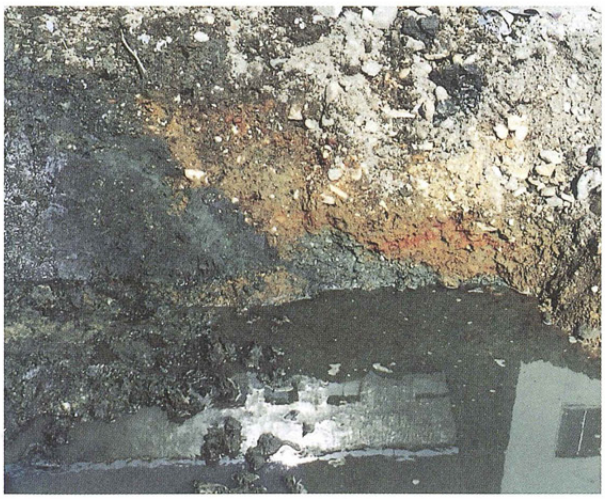
今回の調査では、約1500m²の範囲内に16世紀末から現代に至る４つの生活面を確認しました。三の丸城下町の痕跡は、約170cmもの土層となって残っていました。これは、火災・災害・屋敷替えなどの度に、人工的に整地されて盛土されたためと考えられます。

遺構では、建物址・井戸（上水道施設等）・ゴミ溜・溝などが発見されています。特にゴミ溜は、重複して非常に多く見つかっており、ゴミは各屋敷地に穴を掘って埋め立てて処分していたことがわかります。現代社会でもゴミの処理は非常に切実な問題ですが、江戸時代の城下町においても頭を悩ませる大きな問題だったことでしょう。また、井戸・水道施設が良好な状態で見つかったことも特記されます。特に水道施設は、すべて高低差を利用して三の丸全域に配水していたと考えられ、現代の私たちが考える以上に、高度な技術を駆使していたことがわかりました。

遺物では、当時の人々が使っていた道具類が多量に出土しました。特に調査地一帯の湧水量が豊富であったため、木製品の遺存状況が非常に良好であることが注目されます。なかでも漆器は武士の生活のなかに広く普及していたようで、漆椀だけでも約100点が出土しました。陶磁器類では、国内各地だけでなく輸入品もみられ、当時の活発な流通がうかがえました。

このように、松本市街地の地下には城下町時代の遺構が良好に残存しており、その規模の大きさと重要性を感じるものです。このことは、近世の松本城下町の様相解明に大きな示唆を与えてくれるものです。

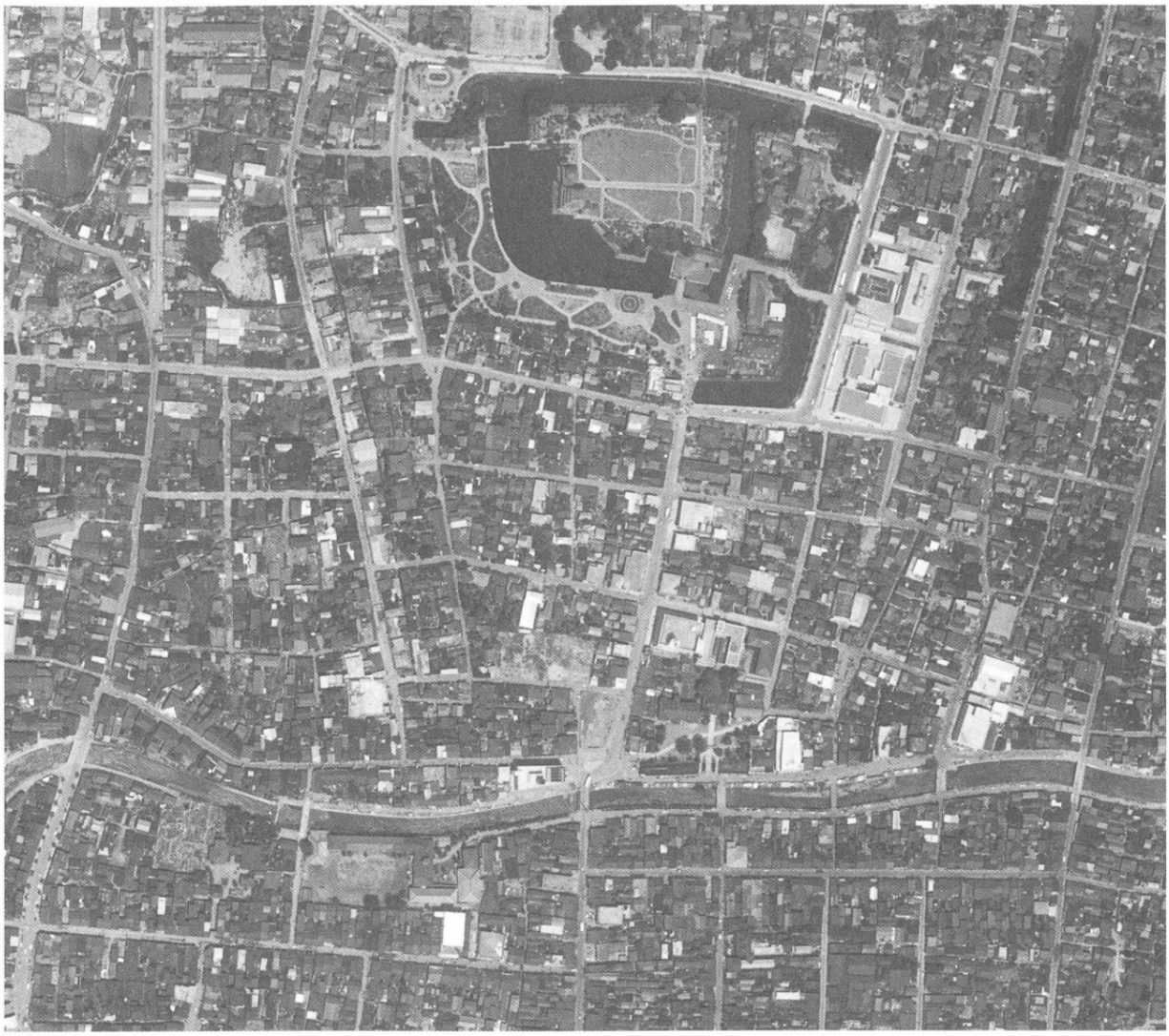
調査にあたっては、市商工部をはじめ関係機関のご理解・ご協力がありました。記して謝意を表します。なお、本報告書は遺跡・遺物の重要性を考えて早期公表との見解から概報として扱いました。なお、遺物・図面等は松本市立考古博物館に保管してあります。



堀と土塁の境界

井戸の発掘

昭和37年の松本城周辺



遺 跡 名：松本城三の丸跡土居尻遺跡
調 査 地：松本市大手２丁目
調査期間：平成３年４月９日～７月１９日
調査面積：5442m² （第１～４検出面の合計）
調査原因：松本市営大手駐車場建設
調査主体：松本市教育委員会
執筆・編集：竹内靖長（松本市立考古博物館）
写真撮影：市川　温（遺構）・宮嶋洋一（遺物）
絵　　図：P３・・・嘉永七年三月改・家中名前附図　（瀬川長広氏　所蔵）
　　表紙・・・松本城見取図　（日本民俗資料館　所蔵）

空中写真：この空中写真は、建設省国土地理院長の承認を得て、複製したものである。
（承認番号）平５関複、第２８３号

葵紋（あおいもん）がある漆器

松本城三の丸跡

～土居尻武家屋敷跡の発掘調査概報～

平成５年３月31日発行

発行　松本市教育委員会

〒390 松本市丸の内３-７

TEL 0263（３４）３０００

印刷　株式会社綜合印刷